



明治から大正・昭和にかけての大ジャーナリストで歴史家としても知られた徳富蘇峰と、明治・大正の文豪徳富蘆花とは兄弟で、ともに二世を風靡した人達である。第二次大戦後は姿を消したが、戦前中等学校・女学校の教科書で、二人の作品が掲載されないことがむしろ珍らしいほどであった。

徳富家は水俣の旧家で、代々、津奈木手永の総庄屋兼代官を勤めていた。健次郎の父一敬には七人の子どもがあったが、上から五人は皆娘であったので、文久三年（一八六三）に長子猪一郎（後の蘇峰）が生れると家内一同大変な喜



トルストイとの記念撮影

びようで、家の相続者として一日も早い成人を期待した。その次に生まれた男子は夭折し、末っ子が明治元年生まれの主人公健次郎である。  
既に猪一郎という嫡男を得ていた両親は、末に生まれた健次郎を孫のように溺愛した。祖父の美信も「公家衆の子の様じや」と言って可愛がった。家内皆が可愛がる側にまわって、教育ということなど考えなかった。そのため健次郎は我が家では我儘一杯に育つてす



大正九年四月廿日  
鈴木喬著

# 徳富蘆花

和解を繰り返すことになった。

徳富家は明治三年水俣から熊本に出た。健次郎は小学校に入ったときから学業の成績は抜群で、本山の日新堂幼学塾（後に本山小学校）では常に首位を占めていた。明治九年の神風連の変を大江村（現熊本市大江四丁目）の自宅で体験し、同十年の西南の役は沼山津の避難先で経験しているが、それらはのちに「恐ろしき一夜」や「灰燼」という作品となって世に問われることになる。「恐ろしき一夜」は事件の当夜我が家で見聞した実見記で、「青山白雲」（明治二十一年刊）に収載されているが、親類一同が数え年九歳の



兄蘇峰との和解

その記憶の確実さと事実の正確さを感じたという。また「灰燼」（明治二十三年刊）は熊本隊に参加した弥富直次郎の切腹事件を主題にした小説であるが、この中には人間性を無視した旧封建士族道徳への批判が多分に含まれている。

神風連の変や西南の役も片付いた明治十一年に、健次郎は兄猪一郎に伴われて京都の同志社に入学したが、二年後には退学して熊本に帰り、共立学舎に籍を置いた。彼はこの頃から小説らしいものを書きはじめていたが、勿論まだ習作程度にすぎなかった。十五年、兄猪一郎が大江義塾を創立したのでその塾生となったが、その後、母久子のすすめもあって熱心なキリスト信者となり、三年坂教会で洗礼を受けた。十九年同志社に再入学し、この時期に多くの良先輩・良友を得て人前でも堂々と発言できる弁論家となり、文才をも大いに発揮した。この頃から「蘆花」の号を用いはじめている。

しかし破局に終わった恋愛事件のため、二十年末に無断出奔し、九州放浪の旅に出て、翌年熊本英学校の教師となった。ここでは彼は生徒の人気教師であり、校内回覧雑誌へも屢々寄稿して全校生徒に感銘を与えた。二十二年親類一同から出奔の罪を許された蘆花は、

東京に帰り民友社の社員となる。社主は今をときめく兄蘇峰であったが、蘆花の仕事は永く下働きの雑報係にすぎなかった。

日清戦争開戦の二十七年、蘆花は原田愛子と結婚し、三十年には兄と別れて逗子に移り住み、独立する決心をした。翌年から国民新聞紙上に連載した小説「不如帰」は、武男と浪子を主人公とする悲恋物語で、満天下の紅涙をしばり、間もなく新派の舞台にも上演されて大当たりをとった。これが彼の出世作であった。三十三年には「思い出の記」を連載して好評を博し、この年「自然と人生」「思い出の記」「不如帰」の三軍行本が民友社から出版された。これらはともに大変な売行きで、いずれも百版以上を重ねた。今や蘆花は押しも押されぬ流行作家と認められ、独立の自信も一段と強まり、再び居を東京原宿に移した。

ところが、同三十五年に国民新聞に連載した「黒潮」という政治小説が意外に不評で、いらいらしているところに国民新聞社との行き違いがおこり、遂に蘆花は兄蘇峰と絶縁した。蘆花は自ら「黒潮社」を興し、「黒潮第一」を出版してその巻頭に兄と国民新聞に対する告別の辞を掲載した。しかし三年後には蘆花は自ら蘇峰の家を訪れて

和解を求めている。

翌年、蘆花は聖地パレスチナ巡礼とロシアのトルストイ訪問の旅に出た。その成果がこの年刊行された『巡礼紀行』である。四十二年東京郊外の千歳村柏屋に最後の居を定めた蘆花夫妻は、ここで美的百姓と呼ばれる半農の生活を送りながら執筆を続け、同年「寄生木」を出版し、大正に入ってから「竹崎順子」「みみずのたはこ」「富士」などを発表して一層の評価を高めた。「寄生木」は挫折した一軍人の生涯を活写し、「竹崎順子」は伯母順子の波瀾の一生を描き、共に読者に深い感銘を与えた。  
昭和二年体の不調を訴えた蘆花は伊香保に転地して療養に努めたが、その死を覚悟して兄蘇峰の来訪を乞い、最後の和解を求めて後事を托し、九月十八日に永眠した。六十年の誠に波瀾に満ちた生涯であった。



自筆の水彩画